

Red Planet 論

—— 白人性の上書きがもたらす帝国の変容 ——

島 克也

序

Robert Heinlein が青少年 SF 読者向けに執筆した長編小説 *Red Planet* (1949) は、火星の植民地に入植した人々が、地球本国から自治と独立を勝ち取る過程を描く物語である。この小説中には、“we cribbed a good deal from the American Declaration of Independence, I'm afraid” (205) というアメリカの独立宣言に関する直接的な言及もあるため、火星の入植者がアメリカの初期開拓者を表象し、火星の植民地の管理者がアメリカを植民地として支配するイギリス人を表象し、先住民の火星人がアメリカ・インディアンを表象しており、アメリカの独立戦争が舞台を移して再現されていると解釈することは容易であろう。¹ このように *Red Planet* は、一見すると単純明快な構造の小説であるように思えるが、そのプロットは注目すべき問題を孕んでいる。それは、この小説における独立が、先住民である火星人の協力によって達成されていることである。実際のアメリカ独立戦争では、自らの土地を奪った開拓者への抗戦を選び、イギリス側についたアメリカ・インディアンが多かったことを考慮すれば、このプロットは歴史改変の欲望を内包しているといえるだろう。

一般的に歴史の改変は、その改変者と受容者にとって「うしろめたい過去」を隠蔽・抹消したいという願望によって為されるものである。Heinlein がヨーロッパ系アメリカ人であること、そして当時の青少年 SF 読者は「高学歴者であり、アメリカでは必然的に白人男性」(森下 153) の予備軍であり、彼らは、「国民国

1 火星人が表象するものに関しては、James Wallace Harris は“The old Martians are like Australian aborigines”と述べているが、Jane Davitt は“It is interesting to note several passing references in the book which link the Martian colony to America's past.”と述べており、火星の先住民をアメリカン・インディアンの表象としてとらえることは妥当であると筆者も考える。たとえば、この小説中には、主人公 Jim を先住民の居住地に迎え入れる際に儀式が執り行われるが、その儀式は“For a long time, nothing was said.”(36)によって始まる。この様子は、高橋順一が、「南部平原のインディアンは初対面の場では口をきかないのが普通なのだ。挨拶さえ行われぬ。(中略)一緒にいながら直接言葉を交わさないという『沈黙の儀式』を経て、はじめて心のふれ合いが始まるのである」(24)と説明している「沈黙の儀式」に酷似しているからである。

家を支える理想的な人物で、豊かな教養と知識を持つ中産階級に属する壮年健常者であり、(中略) 家庭と仕事を愛し、かつ愛国心と国際関心の均衡がとれた白人男性」(関根 211) となることを期待されていたことを考慮するならば、その改変はヨーロッパ系アメリカ人にとって都合のよい、白人優越社会の維持に貢献するものであるはずである。Jack Williamson が “The whole tone of the book is set by the contrasts between the selfish human bureaucrats who exploit the settlers and the courteous and benign Martians who save them.” (19) と指摘するとおり、植民地の支配者層に「悪者」の役割が与えられ、「善良」な先住民との共闘によって達成される独立戦争は、まさに「都合のいい歴史」以外の何物でもない。さらには、Bruce Franklin が “This novel is about growing up. Jim becomes a man. ... The colony issues a Proclamation of Autonomy modeled on the Declaration of Independence” (78) と指摘するように、主人公 Jim の精神的成長は、植民地から自治領への政治体制の変化と並列されている。青少年向け小説では、登場人物の肉体的・精神的・社会的な成長は肯定的に描かれるため、それと並列された政治体制の変化、すなわちアメリカの独立戦争に対しても肯定的な解釈を誘うような仕掛けがこの小説にあるといってもよいだろう。

このような歴史改変を基盤とする *Red Planet* は、確かに「健全な白人男性」を育成する装置として機能しうのだが、同時にその改変がもたらす副作用をも描いているように思われる。その副作用とは、白人優越社会を維持するための支配の道具であるネットワークが、彼らにとっての異分子によって乗っ取られ、制御不能になることであると筆者は考える。本論の目的は、登場人物の白人性の相違に注目することによって、この小説で描かれるネットワーク攻撃を、単なる交通インフラやマスメディアを結節点とする階層型情報ネットワークを強奪することによって達成されるクーデターとしてではなく、中心点を持たないウェブ状の情報ネットワークにおける不可視の言論誘導として読むことである。そのような読みが可能なのは、Heinlein の経歴と、*Red Planet* と、この小説が出版された1949年には原型さえ存在しなかったインターネットの間に、様々な事象が重なり合っているからである。まず、Heinlein は元職業軍人であり、太平洋戦争中は海軍の技術研究所で先端技術の開発に携わっていた。また、この小説に登場する共通言語は “Basic” と呼ばれるものであり、今日でも使用されているコンピュータ言語の一つと同名である。そして、インターネットの前身である ARPANET は、アメリカ国防総省の国防高等研究局からの資金提供によって、核攻撃に備えた軍事データ分散のために開発された側面があった。さらには、この小説には外傷・疾患・寿命による死が登場せず、その人物の存在が一瞬で消え去る特殊な死が何度も登場する。それはアナログ的な肉体の死ではなく、デジタルデータの消去を

思わせるものである。つまり、軍需技術・コンピュータ・情報ネットワークという三者の絡み合いをこの小説に見出すことが可能なのである。

1. 先住民による白人性の上書き

火星の植民地に居住する主人公の少年 Jim は、“advanced terrestrial education” (6) を受けるために、植民地を運営するカンパニーが設立した Lowell Academy へと入学する準備を進めている。このアカデミーで施される教育について、校長 Howe は “I realize that you young people have been brought up away from civilization and have not had the benefits of polite society, but I shall do my best to remedy that. I intend that this school shall, above all other things, turn out civilized young gentlemen.” (47) と立派に聞こえる言葉を述べる。だが、Howe がいう “civilized young gentlemen” は、地球で教育を受けた成人男性と同等の人物を意味するわけではない。Howe の上司である Beecher は、入植者を、“They are a neurotic lot, most of them failures back on earth.” (75) と評価し、Howe も、“If their children are any guide, they are a rebellious and unruly lot.” (75) と同意しているため、地球と植民地の間には埋められない差異があるという認識を両者が保持していることは明らかである。この認識は、立石弘道が「帝国の中心である自国、つまり英国に従属している民族への人種的差別感からくる侮蔑感とそれと表裏一体の優越感」(28) と説明する帝国意識に相違ない。つまりアカデミーは、地球/植民地の階層構造を絶対的なものとして少年たちに付与することによって、植民地を維持するために必要な労働力を再生産し続けるための装置として機能しているにすぎない。したがって、この教育機関においてアイデンティティ形成を終えた青年達は、生徒の自由を奪う新たな規則が設けられたときにも、“I think I'll just sit tight, keep my mouth shut” (44) と述べ、理不尽な規則に対しても従順で、反抗する態度を表すことはない。

Jim の父親 James は、“Many's the time he's told me stories about the school he went to back Earthside and what a rough place it was. I think he's a little bit proud of it.” (53) と Jim が述べることからわかるように、地球を崇拜している。しかし Jim は、そういう父親に少なからぬ違和感を抱いている。そこには、彼がふとした偶然で命を救った毛むくじゃらでボール状の動物の影響がある。Jim はその生物を Willis と名付けて友愛的な関係を結び共に生活をしているのだが、実は Willis は火星の先住民の幼生である。Jim は Willis を通して数々の事件に遭遇し、周囲の少年達とは異なる価値観を獲得してゆく。アカデミーに向かう途上の Jim は、火星人の都市へと招待され、火星による神秘的なイニシエーションの儀式を授けられる。この時、“He had never noticed before how

beautiful they were. 'Ugly as a native' was a common phrase with the colonials; Jim recalled with surprise that he had even used it himself, and wondered why he ever had done so." (37) と思う Jim は、火星に対する評価を大きく変えている。

彼は火星については "Mars was all right the way it was, no need to try to make it more like Earth. Earth was no great shakes anyway." (16) と考え、地球の優位性を認めていない。Howe と面会した後でも、"I don't think I want to become a 'civilized young gentleman.'" (47) とアカデミーの教育を否定し、さらには "his [Howe's] suggestion that a colonial home was an inferior sort of environment had gradually gotten his [Jim's] dander up." (51) と、支配者によって与えられた地球と植民地の階層構造に怒りを感じてゆく。そして、植民地人が厳冬期を過ごすために必要とする集団移動を、カンパニーが利益追求のために不条理にも制限するという情報を得た時には、Willis を連れて学校を脱走し、独立運動の契機を生み出すのである。

このような Jim の意識変化とアイデンティティ形成の様子を、白人性という観点から俯瞰すると、Jim の白人性は物語が進行していく中で変化していることがわかる。藤川隆男は、白人性を居住地と階級の観点から「帝国型 / 共和国型 / 多文化主義型 / 人種主義型」(32) の4つに分類しており、この分類を小説内の登場人物に適用すると、まず、Howe と Beecher が表象するのは、「白人性や人間性に不足する非白人に対しては、文明化、キリスト教化を通じた向上」(藤川 34) を促すが、植民地に対して自発的に自治権を譲渡して独立を促すことはなく、「普遍主義的な白人性に帝国の被支配民が自己同一化できる歴史的可能性」(藤川 34-35) を開くこともない《帝国型の白人性》であり、主に帝国の支配者層が保持する白人性である。一方アカデミーの教育によって Jim に付与されるはずだった白人性は、彼の父親 James を含む入植者達が保持する《共和国型の白人性》であり、この白人性は「白人の民主主義と自由主義の擁護と、市民の平等と生活・文明水準の保持を主張して、国や職場、生活領域からの非白人の排除を要求する」(藤川 33) ものであるが、上に述べたように、帝国中枢と植民地の階層構造を疑うことはない。植民地の円滑な運営のために、帝国の支配者層による教育を通じて付与される白人性である。それに対し、火星人によるイニシエーションを体験した Jim は、《帝国型の白人性》も、《共和国型の白人性》も受け入れることができない。彼は「共和国型に比べればはるかにリベラルで寛容な白人性」(藤川 35) である《多文化主義型の白人性》を持つことになる。そして《多文化主義型の白人性》に支えられる社会では、「文化の多元性が承認され、(中略) 異なった身体的特徴を持つ者が白人性を取得し、白人のようになることが可能」(藤川

35) であるため、Jim が火星人社会に受け入れられるだけでなく、幼生 Willis も地球の共通言語を習得するのである。²

しかしながら、Jim は白人性の選択と獲得を主体的に行ったわけではない。この小説を一読すると、Jim は社会的規範に囚われず、自らが信じる正義を貫く人物であるため、《多文化主義型の白人性》の獲得も、彼の行動力と強い意志によるものであると受け止めてしまいたくなるが、実は火星の先住民による誘導がなされている。そもそも、Jim の火星人社会の訪問は Willis の手引きによって可能となったものであり、火星人が Jim にイニシエーションを与えたのは、《多文化主義型の白人性》を事前書き込むことによって、アカデミーの教育が《共和国型の白人性》を Jim に書き込むことを防止するためと解釈することができる。なぜなら《共和国型の白人性》は、土地や資源の争奪が始まったときに先住民を排斥する方向性を持っており、先住民にとっては危険な白人性であるため、火星人の文化・文明に価値を認めて共存を志向する《多文化主義型の白人性》を持つ人間の少年を生み出すことは、先住民社会にとって非常に有益なのである。

2. 上書きがもたらす帝国のネットワーク障害

Willis は、Jim が《多文化主義型の白人性》を獲得する契機を生み出すという重要な役割を担っているため、その生態と能力については十分に検討する必要がある。

Willis は高い知性を持たない純粹無垢の動物として描かれるが、“Basic” (202) と呼ばれる地球の共通言語を運用する能力を持っており、植民地と先住民の居留地を自在に往来することができる。さらに彼はその外見からは想像できないような鋭く尖った爪を内蔵しており、Howe によって木製のキャビネットに閉じ込められると、その爪を使って脱出することができる。つまり Willis は、この隠された攻撃能力によって、植民地における支配中枢（すなわち Howe の自室）から植民地への越境もできる特殊な存在なのである。

2 残り一つの《人種主義型の白人性》と定義されている白人性は、「白人の身体に限りなく依存するようになる。極端な形態としては、ナチズムや南アフリカのアパルトヘイト体制を支えた」（藤川 33-34）ものであり、いわゆる人種差別の原動力になるものである。しかしこの白人性は、「人種主義に批判的な国際・社会環境、国民統合の進行した状況にあっては、白人集団の特権に対する強い批判を起し、それに対する抵抗によって、白人としての特権や支配権の維持が困難になる」（藤川 36）原因にもなるという弱点がある。すなわちそれは、第二次世界大戦におけるナチズムの惨敗を目の当たりにした20世紀後半、アメリカによる帝国の構築・維持に貢献する国民となることが期待されていた当時の青少年読者が模倣・獲得すべきではない白人性であろう。そのような配慮が働いて、この小説には、《人種主義型の白人性》が登場しなかったのかもしれない。

このような Willis は、その名前の中心部に“ill”が含まれていることから連想できるように、コンピュータ・ウイルスに酷似している。まず、外見はかわいらしいのに攻撃能力を秘密裏に保持しているという身体的特徴は、インターネットユーザーの興味をそそるような画像ファイルや動画ファイルであるかのような擬態を取りつつ、実はそのファイル内部に、コンピュータ内部を破壊するプログラムが仕組まれているというコンピュータ・ウイルスの構造と同一である。また、先住民達が Willis に、彼らの居留地に留まるように諭す時、彼は“things noisy, boisterous, and unrefined” (37) と“Warm” (9) な環境を好むと言い、Jim と共に植民地に「戻る」ことを選択する。この嗜好性は、電源が入ったコンピュータ、すなわち warm なコンピュータが、ネットワークに多数接続されてデータを送受信している状態、すなわち noisy な状態において活動することができるコンピュータ・ウイルスの特徴と重なる。さらに、共通言語を理解する能力を隠したまま Howe に捕獲され、植民地支配の中核へ侵入した Willis が、植民地支配に関する重要な情報を記憶した後に脱出を謀るという動きも、ネットワークの中心を担うサーバーに侵入して、重要な個人情報をネットワークに流出させるコンピュータ・ウイルスの機能に重ねられる。

コンピュータ・ウイルスという概念の初出は、1972年に David Gerrold によって執筆された小説であるため、Heinlein がコンピュータ・ウイルスに関する知識を持ってこの小説を執筆した可能性はない。しかし、Heinlein が描き出した Willis をコンピュータ・ウイルスに重ね、帝国を巨大な情報ネットワークに、植民地をそのネットワークの一部を構成するローカルエリア・ネットワークに、さらに植民地の入植者をそのローカルエリア・ネットワークを構築する個々のコンピュータに例えてこの小説を俯瞰すれば、植民地支配者や植民地の入植者の言動に新たな解釈を与えることができる。

たとえば、《共和国型の白人性》の持ち主であった父親 James の白人性は Willis によって《多文化主義型の白人性》へと書き替えられている。Jim が学校を抜け出してきた時には、自首を勧め、“Marlowes don't run away from the law, Son.” (136) と法を遵守することの重要性を語り、カンパニーによる植民地運営の正当性を疑わなかったが、Willis が持っている会話記録能力によってカンパニーによる植民地の弾圧計画が暴露されると、カンパニーに立ち向かう開拓民のリーダーへと変身する。このような白人性の上書きは、まるで接触感染のごとく、入植者全体に広がってゆくのである。

入植者の大多数が《多文化主義型の白人性》へ上書きされてゆく一方で、上書きされることを拒む人間は悲劇的な結末を迎える。たとえば Pottle 夫人にとって火星は“to get rich in a hurry” (20) という目的を達成する搾取の場以外の

何物でもなく、先住民に接触する機会があっても交流を行う意志もなく、その影響を受けることもない。つまり彼女の《帝国型の白人性》には「上書き禁止のプロテクト」がかかっている。彼女は、植民地の管理者 Beecher を告発しようとする入植者達のアイデアを“this nonsense!” (152) と形容し、Willis を“utterly unreliable” (152) と拒絶する。彼女は入植者の造反に対しても否定的であり、Beecher の“gracious” (172) な降伏勧告に素直に応じることを表明する。しかし入植者が立て籠もっている建物から一歩足を踏み出した瞬間、すなわち《多文化主義型の白人性》を獲得する機会を喪失した瞬間に、カンパニーが設置した兵器によって“a spot of blood on the floor” (202) も残さず火星上から消滅する。強固な白人性故に、彼女のような人物は先住民社会にとって危険なものであるため、デジタルデータのように痕跡も残さずに火星から「削除」されたといえるのである。

こうして、入植者達の白人性の上書きが完了したとき、植民地は機能不全に陥り、帝国による制御が不可能となる。言うなれば、植民地というローカルエリア・ネットワーク全体がハッカーに乗っ取られている状態である。従って、入植者達が自分達の意志でなし遂げたと思っているこの分離独立は、Willis の生みの親である先住民達の誘導によってなされたと言えるのである。

3. 《多文化主義型の白人性》の改変

社会学者である水野由美子は、アメリカ先住民社会がアメリカの政策に翻弄されてきた歴史を詳細に説明する中で、1960年代から70年代にアメリカ西部に関する歴史認識に大きな変化が生じたことを指摘している。それは、従来支配的だったターナーによるフロンティア学説を批判し、『『フロンティア』という概念の『民族主義的で人種差別的』側面に自覚的であり、『侵略、征服、植民地化、収奪、開発、世界市場の拡張』といった概念を用いて西部社会の形成と変遷を論じ』（水野65）の「新しい西部史」と呼ばれる歴史観が発生したからである。「新しい西部史」に対するその当時のアメリカ社会の反応について、水野は次のように説明する。

興味深いことに、「新しい西部史」を標榜した歴史学者の主張に対しては、学界内部よりもむしろ、新聞や一般向けの雑誌において、大きな反響があった。たとえば『アリゾナ・リパブリック』誌のコラムニストであるフィル・サンケルはこう述べている。多くのアメリカ人は「小さなうそに満ちているとはいえ、物語化されたわれわれの過去に満足している」のだから、「（新しい西部史を標榜する）修正主義者達ははげ、われわれの神話をそっとしておいてくれないのだろうか」（66）

ここで言及されているサンケルによるつぶやきは重要な意味を帯びている。ヨーロッパ系アメリカ人にとって、アメリカの独立戦争と建国は国民的アイデンティティを形成する神聖不可侵かつ最大の「偉業」である。しかしその「偉業」は、山田史朗が建国当時のアメリカ政府が先住民に対して行った政策を考察する中で、「先住民の文明化、すなわち定着農耕・キリスト教信仰・英語・学校教育などの白人文明の受容を先住民に迫ることもあった」(86)と述べているように、先住民文化・文明の掃討によって達成されたという側面を持つ。そのような過去への後ろめたさが、ヨーロッパ系アメリカ人の国民的アイデンティティに暗い影を落としていることを、サンケルの言葉は的確に表現している。そして同時に、アメリカ各地で発生・蓄積されていたアメリカン・インディアンに関する社会的問題は、「新しい西部史」が生まれる1960年代まではほとんど報道されなかったことも意味しているのである。

それを10年以上遡る1949年に、Heinleinがこの小説を執筆し、大手出版社Scribner'sが出版したことには、第二次世界大戦後の世界情勢が大いに関係しているだろう。1946年におけるフィリピンの独立をアメリカが承認したことを始めとして、ヨルダン独立(1946年)、インド・パキスタン独立(1947年)、ビルマ・スリランカの独立(1948年)、ラオス・インドネシア独立(1949年)など、世界各地の植民地の独立が相次ぎ、この小説出版後も、リビア独立(1951年)、カンボジア独立(1953年)、ベトナム独立(1954年)、スーダン独立(1956年)など、脱植民地化の流れは世界各地で広がっていった。このような世界情勢において、アメリカの独立戦争を連想させる小説が出版されれば、小説中の独立運動もまた、世界各地の独立運動と同質のものとして肯定的に読まれることは当然といえる。しかもそこで描かれる独立運動は、入植者と先住民が共闘することで達成されるため、「新しい西部史」とは違って、ヨーロッパ系アメリカ人の「神話をそっとしておいて」くれる側面がある。さらには、物語の中で《帝国型の白人性》や《共和国型の白人性》を駆逐し、先住民の文化・文明を尊重する態度を示す《多文化主義型の白人性》は、人種問題と民族問題を解決しつつ、白人優位社会を維持することを可能とする、ヨーロッパ系アメリカ人にとって理想的な「新しい」白人性として当時の読者の目に映ったと考えることも妥当であろう。このように *Red Planet* は、アメリカの青少年読者に、アメリカ独立戦争の歴史的正当性を確認させる場を提供すると同時に、新たな国民像を提示し、アメリカの帝国化を肯定する側面を確かに持っているのである。

しかし、第一章、第二章で分析してきたように、この小説に登場する帝国を一つの巨大なネットワークとして捉え、登場人物の白人性の変異をプログラムコードの書き換えと捉えてこの小説を俯瞰した場合、ネットワークから疎外された先

住民が、ネットワーク内の共通言語 Basic の運用能力を備えたウイルスを注入することによって、帝国のシステムを改変する様子を描く物語として解釈することも可能である。ここで注意すべきことは、そのウイルスが、帝国の構成員の白人性を《帝国型の白人性》や《共和国型の白人性》から、《多文化主義型の白人性》に上書きするだけでなく、同時に《多文化主義型の白人性》自体を改変していることである。

一般的な《多文化主義型の白人性》は、寛容かつリベラルなものであると同時に、「帝国主義的支配や文明化の使命と本質的に矛盾するものではなく、対外的攻撃の正当化の手助けもする。(中略) ナショナリズムに包摂され、普遍性を失う傾向を同時に持つ」(藤川 35) 力強い攻撃性も有している。しかし《多文化主義型の白人性》を獲得したはずの入植者達は、独立運動の際には、帝国の包囲網を自力で破ることができずに先住民達の助力を必要としたし、オリジナルの独立宣言を考案することもできない。独立宣言が裁可された直後でさえも、入植者達の精神的支柱である MacRae 博士は、自治独立について、“It’s got to stick.” (211) と暗い予感を表明するほどであり、遂には火星における主導権を先住民に返還することを承諾してしまうのである。つまり、入植者達が獲得した《多文化主義型の白人性》は、本来の《多文化主義型の白人性》とは違って脆弱なものなのである。すなわち、第二次世界大戦後の世界情勢において白人優越性を維持するために最適化された本来の《多文化主義型の白人性》ではなく、先住民にとって都合のよい、抑制のきく矮小化された亜種の《多元文化主義型の白人性》に他ならないのである。

結

藤川は、《多文化主義型の白人性》が「帝国型および共和国型が第二次世界大戦後急速に消滅するなかで登場」(35) し、「最も可視的な人種主義型の白人性を非難し、それとの差別化を図ることで、より透明性を高め、民主主義と同一化した」(35) と説明しているが、*Red Planet* も、《多文化主義型の白人性》が《帝国型の白人性》および《共和国型の白人性》を打倒し、植民地を民主主義に基づく自治領に変えるという物語になっている。可視的・地理的な植民地を運営するイギリス型の帝国が消滅し、多くの国家を巻き込む冷戦構造が成立・深化していく中で、アメリカが不可視的な情報ネットワークを活用する新たな支配形態の帝国となり、独立国家を間接的な「植民地」にしていくことが、1949年の時点で正確に予測されているのである。

そして同時に、《多文化主義型の白人性》を改変することによって、植民地の換骨奪胎に成功する火星の先住民が、実は《多文化主義型の白人性》が持つ修正

不能の脆弱性を露呈させていることにも注目すべきである。その脆弱性とは、《多文化主義型の白人性》が持つ「寛容さ」のことである。肌の色の違いによって身体的非白人を隔離してきた《帝国型の白人性》や《共和国型の白人性》とは違って、《多文化主義型の白人性》によって構築された社会は、リベラルかつ寛容に多文化・多民族の併存を歓迎するという「建前」を持つため、身体的には白人ではないが帝国内の共通言語を使用できる存在を歓迎する態度を示す必要がある。そして、この「建前」故に、その存在によって共通言語で発せられた言説がネットワークに勝手に乗って流通するのを規制・検閲することもできない。結果としてその言説は、帝国のネットワークの中で、支配者たる白人多文化主義者達による言説と混ざり合っ^て溶け合い、次第に区別することができなくなり、気付かない程度に僅かずつ支配的言説を変質させてゆく。その時、白人多文化主義者達の白人性もまた変容するのである。

そして、このような言説の混じり合いは、今日のインターネットでも発生している。世界各地に居住する人々によって発せられたインターネット上の言説を我々が目にするとき、その言説の身元を確認することは不可能なことが多い。身元特定が困難であることが当然であることに慣れると、我々はその言説の発信地や背景を考慮することなく言説を受容するようになるのである。

《多文化主義型の白人性》による支配を妨げる要素は、先に述べた冷戦構造という「実際の歴史」にも存在する。世界各地で発生した脱植民地化という歴史的文脈でこの小説を読んだ場合には、第三章で述べたように、この小説は「帝国であるイギリス／植民地であるアメリカ」という二項対立を軸に展開し、アメリカ建国の歴史的正当性を擁護するものとして解釈されうる。しかし、西側諸国の盟主を自認するアメリカが、軍事・政治・経済・文化などあらゆる側面で帝國的性格を強めていき、自国の利益追求も露骨かつ過激になっていった冷戦構造という歴史的文脈でこの小説を読んだ場合には、「帝国であるアメリカ／戦後に独立を果たす世界各地の植民地」という二項対立を軸に展開し、《多文化主義型の白人性》に潜む攻撃性と危険性を暴露するものとして解釈することも可能である。すなわち前述した Jim の “Mars was all right the way it was, no need to try to make it more like Earth.” (16) という台詞も、長い伝統を持つイギリスの文化・文明に対するアメリカ開拓民の反撥を示すものというより、メディア・経済・テクノロジーによってネットワークを掌握して「ミッキーマウス」と「マクドナルド」と「ウィンドウズ」をばらまき続けるアメリカに対する、旧植民地人の反撥として解釈されうるのである。

広島大学大学院

引用文献

- Davitt, Jane. "Red Planet - Blue Pencil." *Heinlein Journal*. 8 Jan. 2001
<<http://heinleinsociety.org/rah/works/novels/redplanetbluepencil.html>>.
- Franklin, Bruce H. *Robert A. Heinlein America as Science Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1980.
- Harris, James Wallace. "Red Planet by Robert A Heinlein." *Auxiliary Memory*. 1 Nov. 2008 <<http://jameswharris.wordpress.com/2008/11/01/red-planet-by-robert-a-heinlein/>>.
- Heinlein, Robert. *Red Planet*. New York: Charles Scribner's Sons, 1949.
- Williamson, Jack. "Youth Against Space: Heinlein's Juveniles Revisited." *Robert A. Heinlein*. Ed. Joseph D. Olander and Martin Harry Greenberg. New York: Taplinger, 1978.
- 関根政美「多文化の中の白人性——オーストラリアの多文化主義論争から」『白人とは何か？——ホワイトネス・スタディーズ入門』藤川隆男編 刀水書房 2005年 208-20頁。
- 高橋順一『はるかなるオクラホマ——ネイティブアメリカン・カイオワ族の物語りと生活』はる書房 2002年。
- 立石弘道「これまでのロレンスとアメリカ／帝国——紀行文を中心として」『D・H・ロレンスとアメリカ／帝国』富山太佳夫・立石弘道・宇野邦一・巽孝之編著 慶應義塾大学出版会 2008年 13-54頁。
- 藤川隆男「白人性と世界構造——二つの白人性」『白人とは何か？——ホワイトネス・スタディーズ入門』藤川隆男編 刀水書房 2005年 27-37頁。
- 水野由美子「先住民・フロンティア・ボーダーランド——スペイン・メキシコ・合衆国による支配の比較検討——」『グローバリゼーションと帝国』紀平英作・油井大三元編著 ミネルヴァ書房 2006年 63-86頁。
- 森下一仁『思考する物語 SFの原理・歴史・主題』東京創元社 2000年。
- 山田史郎「アメリカにおける白人の形成—先住民・アフリカ人・移民の交錯」『白人とは何か？——ホワイトネス・スタディーズ入門』藤川隆男編 刀水書房 2005年 83-94頁。

Robert Heinlein's *Red Planet*:
An Alteration of "Empire" Caused by Overwriting Whiteness

Katsuya Shima

In *Red Planet* (1950), Robert Heinlein narrates the process of a fictional independence movement on Mars: the colonists on Mars who came from the Earth achieve independence from colonialism with the aid of the indigenous people of Mars. The readers of this novel can easily recognize that the colonists on Mars represent the early colonists of America, the administrators of the colony represent the government bureaucrats of the British Empire, and the indigenous people of Mars represent Native Americans. My aim in this paper is to show that independence is not achieved by the colonists' will but by the indigenous people's influence. In order to demonstrate this, I will classify the characters into three groups in terms of whiteness and point out that the indigenous people succeed in bringing an end to the colonial period by changing the colonists' whiteness. Furthermore, I will point out that the process of independence movement is similar to the way in which computer viruses invade a computer network and bring on system failures.

The characters in this novel are divided into three kinds of whiteness. (1) The "imperialistic" whiteness: people who have this whiteness introduce Western civilization to non-white people in colonies but do not promote democracy or independence. They treat the indigenous people as the exploited class. (2) The "republican" whiteness: people who have this whiteness claim to preserve equal treatment in their society and yet exclude non-white people from their society. They regard the indigenous people as the enemies in the battle for existence. (3) The "multicultural" whiteness: people who have this whiteness are more liberal than the former two categories, and affirm racial and cultural diversity in their society. They regard the indigenous people as a different ethnic group they should coexist with.

These three kinds of whiteness represent the opposing factions in this novel. The administrators of the colony who have the "imperialistic" whiteness imprint the "republican" whiteness on the colonists and make them obedient in order to maintain the society of the colony. On the other hand, the indigenous people, who regard the "republican" whiteness as exclusive and dangerous, try

to delete it from the colonists and to imprint the “multicultural” whiteness on them in order to make them emerge from colonial rule.

It should be noted that the “multicultural” whiteness in today’s world is slightly different from the “multicultural” whiteness in the novel: although the “multicultural” whiteness in today’s world pretends to be liberal and democratic, people who have this whiteness share the dominant position in their society. On the other hand, the colonists in the novel who are imprinted with the “multicultural” whiteness are in a dependent position in their society. This is because the indigenous people have a clear intention to wrest back control of Mars.

This novel can be read as a story about a network failure caused by an invasion by a virus: the indigenous child in this novel who is sent to the colony goes everywhere in the colony, steals some highly confidential information, changes the colonists’ whiteness, and finally triggers the independence movement. Although the colonists think that the independence has been achieved by their own will, they are controlled by the indigenous people. We can find several similarities between the child’s activities in the colony and a computer virus’s activities in a computer network.

Graduate School of Letters, Hiroshima University